

【目的】 山口大学病院では、処方・注射オーダをはじめとした様々なオーダリングシステムを構築し、医薬品適正使用の一助として活用している。一方、薬物血中濃度モニタリング (TDM) についてはこれまで、依頼から結果報告まで手書きであったため、緊急時においても報告書の返却にかなりの時間を要していた。そこで 2004 年 8 月の当院病院情報システム更新に併せ、依頼から報告までをすべてコンピュータ上で行う効率的な TDM オーダリングシステムを構築したので報告する。

【概要】 医師が入力したオーダ情報は、薬剤部に設置した専用端末へ送信される。薬剤部ではこの情報を元に薬物血中濃度を測定するが、この端末とオンライン接続させた測定装置 Axsym (abbott) を用いる場合は、検体ラベルに付したバーコード活用により測定から結果入力までを自動化することで省力化を図っている。測定後、解析ソフト YUHR-tdm を用いて動態解析を行い、解析結果グラフをスキャナで画像化したもの及びワープロ入力した薬剤師コメントを、測定値と共にオーダ上へ送信する。これらの情報は病院情報システムのいずれの端末からも閲覧可能である。また、オーダ情報は医事システムへも反映させている。

【結果・考察】 システム構築においては、入力項目を選択方式とするなど医師の負担軽減を図るよう工夫した。その結果、稼動直後から手書きによる依頼はほとんどなく、本システムへスムーズに移行し得た。また、オーダシステムと測定機器とのオンライン接続により業務の省力化を図ると共に、オーダ上に解析グラフも含めた報告書を送信することで、緊急依頼時には約 1 時間での TDM 報告書返送が可能となった。即ち TDM の目的である薬物療法の個別化を適正かつ迅速に行う上で有用なシステムと考えられる。